

## NGO インターン・プログラム 完了報告書

団体名	公益財団法人 PHD 協会
育成期間	令和7年6月1日～令和8年3月31日
氏名	山本 真記子

**1) インターン期間を通じて得たもの**

本インターンで得た最も大きな学びは、国際協力を「理念」や「理想」としてではなく「現場で生きている営み」として理解できたことである。これまでは制度整備や支援体制といった枠組みを中心に国際協力を捉えてきたが、実際に現場に立つことで、制度の有無だけでは語れない、人と人との関係性の中で支援が成り立っていることを実感した。同時に、自分はこれまでどこかで「支援する側」という立場に立って物事を見ていなかったか、という問いも生まれた。

国内研修（鳥取・東日本・西日本）においては、聴覚障害のあるネパール人研修生の通訳支援を担当した。通訳という役割を担いながらも、「自分の通訳は本当に十分だろうか」「自分の理解不足が相手の学びを妨げていないだろうか」と迷いを感じる場面もあった。言語保障は単なる情報伝達ではなく、安心して学べる環境そのものを支える行為である。実際に、十分に伝わったときには研修生の表情や発言が変わることを目の当たりにし、情報アクセスが学習機会や自己肯定感に直結することを体感した。一方で、伝えきれなかったのではないかと感じる瞬間には自身の力量や責任の重さを痛感した。

神戸女子洋裁専門学校や講演現場への継続的な同行・通訳業務を通しては、専門教育の現場における丁寧な関わりの重要性を学んだ。技術習得は本人の努力だけでなく周囲の理解や継続的な支援によって支えられている。その姿を見ながら、自分はどこまで当事者の将来に責任を持てるのか、通訳という立場の限界とは何かを考えるようになった。同時に、媒介者である自分もまた、現場の一員として学び続ける存在であることに気づいた。

ネパールおよびインドネシアの現地訪問では、当事者団体が教育支援、就労支援、通訳育成、生活支援など多面的な役割を担う現状を知った。制度や財政基盤が十分ではない状況の中でも、当事者自らが主体となり社会を支えようとする姿勢に深い感銘を受けた。しかし同時に「自分は外部の立場としてこの現実をどのように語るべきか」「短期間の訪問で理解したと思いついていないか」という葛藤も生まれた。支援や協力という言葉の背後にある力関係や距離感について、これまで以上に慎重に考えるようになった。また、日本で制度が整備されてきた背景には、当事者による長年の運動と社会への働きかけがあったことも再認識した。現在享受している環境は自然に存在しているのではなく、多くの人の声と行動の積み重ねの上に成り立っている。その事実に向き合う中で、自分はこれからどのような立場で社会に関わるのか、当事者の声にどう応答していくの

かという問いが強く残った。

本インターンを通して、支援は一方的に与えるものではなく相互に学び合う関係性の中で成立することを改めて理解した。同時に、自分自身もまた未熟であり、学び続ける立場であることを自覚した。現場で多様な立場の声を直接聞き、迷いながらも向き合った経験は、今後の進路や専門性を考えるうえで大きな財産となっている。葛藤を抱えたまま終わるのではなく、その問いを持ち続けることこそが今後の自分に求められている姿勢であると感じている。

## 2) 今後の課題

今後の課題として第一に挙げられるのは、現地団体の活動や社会背景をより深く理解する力を高めることである。今年度にネパールおよびインドネシアの当事者団体を訪問し、教育支援、職業訓練、権利擁護、手話通訳者の育成など、多岐にわたる活動が行われていることを知った。一方で、安定した財政基盤や体系的な人材育成制度は十分とは言えず、限られた人員と資源の中で活動を継続している現状も見えてきた。今回の訪問を通してその一端を理解することはできたものの、活動の背景にある社会構造や制度、地域の文脈まで十分に把握できていないと感じている。今後は現地団体の活動報告や関連資料を継続的に読み込み、職員の方々との対話を重ねることで、表面的な理解にとどまらない視点を身につけていく必要がある。

また、支援のあり方について自分自身の視点をさらに深めていくことも重要な課題である。現地での対話を通して、外部からの支援が時に「依存」を生み出してしまう可能性についても考えさせられた。外部支援は必要である一方で、それが主体性を損なわない形で行われているのかを常に問い続ける姿勢が求められる。今回の経験を通じて、支援を行う側の立場や価値観が無意識のうちに影響を与える可能性について改めて認識した。今後は、支援する側／される側という構図にとらわれず、当事者主体の視点を意識しながら関わる姿勢を身につけていきたい。

さらに、当事者や若者の声をより丁寧に聞き取る力を高めていくことも今後の課題である。今回のヒアリングでは、能力や意欲があっても家庭の経済状況や保護者の理解不足、社会の偏見などによって進学や就労の機会が制限されている現実を知ることができた。しかし、限られた時間の中での聞き取りであったため、一人ひとりの背景や状況を十分に理解するには至らなかったと感じている。今後は対話の機会を大切にしながら、当事者の声に丁寧に耳を傾け、その背景にある課題をより深く理解できるよう努めていきたい。

今年度の経験を通して、国際協力においては短期間の関わりだけで状況を理解したと錯覚してしまう危険性があることを実感した。真に対等なパートナーシップを築くためには、相手国の文化や社会背景への理解を深めながら、当事者主体を尊重した関わり方を模索していく必要がある。

これらの課題を踏まえ、インターン2年目では短期的な成果だけに目を向けるのではなく、継続的な対話と相互理解を大切にしながら現地の状況をより深く理解し、当事者の声に丁寧に耳を傾ける姿勢を実践していきたいと考える。

### 3) 今後の進路について

本インターンでの経験を通し、障害分野における国際協力や通訳支援に関わりたいという思いはより具体的で現実的な目標へと変化した。当初は漠然と「国際協力に関わりたい」という関心を抱いていたが、実際に現場で言語保障や情報保障に関わる中で、その重要性和責任の重さを体感した。とりわけ、情報へのアクセスが確保されることで学習意欲や発言の積極性が高まり、逆に保障が不十分な場面では機会そのものが制限されてしまう現実を目の当たりにし、自身の専門性を高める必要性を強く実感した。

今後は多文化共生や聴覚障害者支援の分野で実務経験を積みながら、制度理解と実践力の双方を高めていきたい。現場での経験を通して課題を具体的に把握し、そのうえで制度や政策の在り方を考えられる視点を養うことが目標である。また、通訳や支援の技術向上だけでなく、当事者主体を尊重し対等な関係性を築ける実践者でありたいと考えている。

本インターンで得た経験は、自身の進路を方向づける大きな転機となった。今後も問いを持ち続けながら学びと実践を重ね、障害分野における国際協力の担い手として成長していきたい。

### 4) 団体コメント欄

インターン山本は本プログラムの1年を通して大きく成長し、また、聴覚障害のある研修生を招聘するという組織にとって新たな挑戦にも大きく貢献した。これらの学びや貢献については、上記報告において十分に示されており、育成担当としても本プログラムの成果を実感している。来年度は、実務面においてさらに専門性を高めていくことを期待したい。団体としても、山本が今後、世界の平和と健康に貢献できる人材として成長していくよう、引き続き全力でサポートしていきたい。